様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　１日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０１７５
研究課題名（和文）　中世における談義書の研究――天台論義を中心として――

研究課題名（英文）Study of the Dangi book in the Middle Ages――Mainly on a doctrinal dispute of the Tendai sect――

研究代表者
渡辺麻里子（WATANABE　MARIKO）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：30431430

研究成果の概要（和文）：天台談義書を総合的に理解するために、論義の観点から分析した。重要と判断される『宗円集』『宗満集』『天台深極抄』『七百科條鈔』などの論義書について、諸伝本の調査収集を行い、本文を翻刻、内容を解説報告した。また尊舜の龍女成仏説を資料紹介し、その教義について解説した。これらの成果は、報告書『中世における天台論義書関係資料』としてまとめ、刊行した。

研究成果の概要（英文）：This research is an investigation and collection of various manuscripts and printed books related to 『宗円集』『宗満集』『天台深極抄』『七百科條鈔』 and so on. These Tendai Rongi Books are very remarkable and significant texts in Tendai Dangi Books.We deciphered these texts and investigated contents and reported.We also introduced the related a document about “Ryunyo Jobutsu” that is the theory of Sonsyun and published the book concerning the result of research that is mentioned above and the commentary of his doctrine.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：談義・論義・宗円集・宗満集・天台深極抄・尊談・龍女成仏・七百科

１．研究開始当初の背景

（１）文学研究の成果と問題点

中世文学の研究上、談義書は、早くから注目されていた。佐竹昭広氏『下剋上の文学』では文学との関係が指摘され、近年では、廣田哲通氏『中世法華経注釈書の研究』や『中世仏教文学の研究』などの著作や、中野真麻理氏『一乗拾玉抄の研究』、田中貴子氏『室町お坊さん物語』、阿部泰郎氏ら編『直談因縁集の研究』などによって談義書の意義が論じられ、学界でも議論されていた。

文学研究による談義書研究、談義書中に見られる文学的表現への注目や、文学的手法による解析で、大きな成果を上げていた。しかし、談義書は仏教教理を説くものである。談義書の大部分は仏教的・教学的な内容が占めるが、その内容解析には手が及んでいないた

め、注目され、その意義が認められている談義書であるが、いずれの作品についても、全体的な解析には及んでいない。

（２）談義書の基礎的研究

また談義書は、その作品数は膨大に存在するが、『鷲林拾葉鈔』や『法華経直談抄』など、ごく限られた典籍のみに議論が集中しており、談義書を総体的に研究する必要があった。当初、談義書を総合的に研究するために必要な文献資料について、文献目録、文献解題、翻刻などといった基礎的研究が全く進んでおらず、研究の基盤作りを早急に行い、談義書の数多くある資料を研究の俎上に載せることが、緊急の課題となっていた。

代表者はこれまで、様々な文庫の資料調査を行い、『身延文庫典籍目録』や『叡山文庫天海蔵識語集成』を刊行し、尊舜の著作目録を作成して学会で発表するなどして、天台談義書研究の基礎整備を進めては来たが、談義書はその数が膨大であるため、個人の成果には限界がある。複数の研究者で、資料収集・分析といった基礎研究を遂行する必要を感じていた。

（３）仏教学からの視点

また談義書は、平安・鎌倉・室町と展開する天台教学の議論を詳細に記した貴重な文献であるにもかかわらず、教学面での研究も進んでいない。仏教学からは、中世の談義書は、中古の教説と変わらない物として看過されていた。

代表者はこれまで、草木成仏や龍女成仏、入重玄門などの論題について教学的な分析を行い発表してきたが、天台論義の題目は膨大にあり、かつ教義は難解で複雑である。個人での研究には限界があり、天台教学を専門とする研究者と協力して、教学面からの論義の分析を行う必要があった。

談義書や論義書は厖大にあるため、着手する点として、天台教学の室町後期における集大成である、天台僧尊舜の著作を起点にすることとした。尊舜の著作をもとに天台論義の議論を整理・分析することにより、論義の教学的な議論を解明できると見込まれた。

尊舜の著作の代表的なものは、これまで代表者が基礎研究を済ませているため、論義の内容分析に、すぐに着手することが可能であった。

なお、本研究において、「談義書」とは、談義を通じて生まれた書物の総称として使用している。これまで研究上では「直談抄」という総称が用いられていたが、「直談」の語が多義語であり、特殊な意味でも用いられること、またいわゆる〈直談抄〉の諸書（例えば、『鷲林拾葉鈔』『一乗拾玉抄』など）においてもその定義を議論し、問題にしているため、混乱を生じないよう別な用語として、「談義書」という語を用いている。

２．研究の目的

（１）概要

談義の場では、経典や宗旨の講義を通じ、所化が筆記したノートや、筆記録をまとめ直した書物、一方の能化が講義用に用意した書物などといった多くの書物が生み出された。こうした学僧たちの営為を解明することは、仏教の観点からは勿論のこと、文学や歴史学、そのほか広く日本文化学の観点からも取り組むべき研究課題である。

談義書は厖大な資料が現存しているにもかかわらず、研究の対象とされたものはまだごく一部であった。

本研究は、仏教教義の専門家と、仏書調査の専門家と共同研究にすることによって、未整理の談義書・論義書の整理・分析を試みる。そして、談義書について論義書という観点から分析を試みることを目的とする。

（２）談義書・論義書の調査・整理

談義書は厖大な資料数があるにも関わらず、多くの書目が整理されていない。本研究でも、全体と一度にまとめて整理することは不可能なため、重要なものと判断される書目を絞り、調査収集、整理する。伝本をまとめ整理することにより、基本書目の解明を目指す。

（３）論義の内容を分析する

論義の題目は多種多様にあるが、その中で重要なものに絞り、教義の内容を分析する。

まず室町期を代表する天台の談義僧尊舜（一四五一～一五一四）の著作、特に『鷲林拾葉鈔』及び『尊談』を起点とする。尊舜の著作は、平安から鎌倉、室町時代にかけての天台教学、また同時代の他の学僧の論義を網羅して編纂され、いわば天台教学の集大成であるといえる。そのため尊舜の著作を分析することは、ひいては天台談義書や論義書を検討する端緒となる。

また教学の内容としては、「龍女成仏」論に注目する。龍女成仏は、天台教学のみならず、文学や歴史の分野にも大きな影響を与え、そのために長らく問題とされてきた、広がりのある論題である。

（４）談義書・論義書を翻刻刊行する

談義書または論義書は、膨大な典籍群が現在に遺されている。しかしその多くは、未整理のままで研究に使える状態にない点が問題である。

基礎的作業として、本の所在、伝本の確認などの目録整備、諸本の収集・分析による伝

本研究、翻刻による本文の作成など、基礎作業のいずれもがなされていない文献が数多くある。

談義書や論義書は、独特の表記で行われるため、写本の解読がなかなか困難な状況にある。また内容面として、仏教教義の難解さや教理独特の語彙が多く含まれていることから、翻字が困難な状態にある。また、論義書は、本の形態としても、一般の和古書と違い、扱いが難しい点が多くある。これらの困難から、翻刻資料が少なく、多くの人が談義書資料を手に取れる状態に無いのが現状であった。書名だけは知り得ても、実際にその本文を見ることが出来ないという状況は、談義書研究・論義書研究の進展を阻んでいる大きな要因となっている。

以上の問題意識から、本研究では、談義書および論義書を、仏教教学からの観点、そして仏教典籍の資料としての観点から分析することを目的とする。そして、仏教教学と仏教典籍の調査に精通した研究者の方々の研究協力を得て、談義書・論義書の基礎的研究を進めることを計画した。

上記の困難を少しでも解決し、重要書目については、翻刻資料を提供することが目的である。基礎研究が進み、一次資料の整備が進み、研究材料が公に提供されれば、現在よりも多くの研究者がそれらの資料を活用し、研究に参画することもできるようになる。また、他分野の研究にも活用されることとなる。そうした研究環境の整備を目的とする。

３．研究の方法

（１）教学面からの検討

本研究は、仏教教学面での分析・検討と、論義関係資料の収集と分析を二本の柱として行った。

まず、第一の柱である教学面での検討という点では、二人の研究者の協力を得て行った。研究分担者の大久保良峻氏（早稲田大学）は、『天台教学と本覚思想』を著した天台教学の専門家である。『鷲林拾葉鈔』や『尊談』に記される天台論義の内容の分析を行う。また尊舜だけではなく、古くは中国天台から日本へ、日本では平安時代から近世にいたるまでの、談義書・論義書を対象に、論題の内容や解釈の変遷について、通史的な研究も行う。

もう一名、研究協力者のジャクリーヌ・ストーン氏（Jacqueline I.Stone　プリンストン大学）は、著書『Original Enlightenment and the Transformation of Medieval Japanese Buddhism』を著し、中古天台の教学について幅広く論じられている。また論文「日本中世の天台宗に於ける法華経注釈書―尊舜の『法華文句略大綱私見聞』を中心に」において尊舜の教説に注目して論じた天台教学の専門家である。尊舜の著作に限らず、中古天台の特徴的な論題を分析して、論義の内容と展開について検討、様々な協力を得た。

（２）談義書・論義書の収集整理・分析

第二の柱は、談義書及び論義関係資料の収集と分析である。こちらの点も、それを専門とする二名の研究者の協力を得た。研究協力者の藤平寛田氏（天台宗典編纂所編集員）は、長年『続天台宗全書』の刊行に携わってこられた研究者である。個人でも、尊舜が重視する心賀や心聡などの学僧の著作や、『枕月集』など重要な論義書の研究を発表されてきた多くの業績がある。天台の文献資料の調査分析の専門家であると同時に、天台教学の専門家でもある。本研究では、論義書・談義書文献の重要書の選定、収集及び分析を行った。調査も同行し、現場での検討も踏まえながら、分析を行った。

またもう一名の研究協力者である都守基一氏（日蓮仏教研究所主任）は、「中山日佑著『立正安国論私見聞』の一考察」などの多数の論考があり、文献資料の調査分析にも多くの業績がある。歴史が専門であるが、日蓮教学および天台教学にも詳しく、そうした知見を活かして天台論義書の調査収集や、分析に協力いただいた。

尊舜教学の分析には、天台談義所に学んだ日蓮宗の学僧の著作との比較検討が不可欠で、例えば、尊舜と同時代の日蓮宗の学僧日朝の著『補施集』は、引用文献やその内容において、『鷲林拾葉鈔』と多くの共通点を持っていて重要である。

天台寺院に失われた天台論義書は、日蓮宗の総本山である身延山久遠寺身延文庫に多く遺されている。身延山久遠寺をはじめとする日蓮宗寺院における論義関係資料の調査・分析を行い、日蓮教学における天台学という視点から、中古天台の談義書・論義書の内容解明を行う。

なお本研究では、尊舜の教学を起点としつつも、視野は大きく時代を超えて縦断的に、そして幅広い資料を視野に入れて横断的に研究を進めることを目指した。尊舜の著作を起点とするが、広く中古天台を視野に入れ、談義書・論義書の研究に資する内容の書目を研究対象にしている。

４．研究成果

（１）談義書・論義書資料の調査と整理

四年間で、叡山文庫（滋賀）、求法寺（滋賀）、西教寺（滋賀）、天王寺（東京）などの調査を複数回行い、談義書関係資料・論義書関係資料の収集整理を行った。

調査対象書目は、『宗円集』『宗満集』『天台深極抄』の他に、『天台四教略抄』や『論

義決択口義』、等海『論義故実』、尊舜『天台伝南岳心要見聞』、双厳院蔵『論題集』、実海『塩味集』、実海『夷希集』、『雑盥集』、『雑々集』、『宗要集』など、多岐に渡って行った。

談義書資料については、当初計画以外のもの以外にも多くの発見もあり、計画以上に進めることが出来た。特に、叡山文庫仏乗院蔵『鷲林拾葉抄』写本、及び、『轍塵抄』写本二種は、新たな知見を得た。また、『摩訶止観伊賀抄』の収集・分析の過程では、談義書資料の書写奥書と伝領奥書の扱いが問題となり、理解を深め、一定の結論を得ることが出来た。

また論義関係では、『論題集』『論議集』『論議所作古実』などを中心に、多くの書目を収集し、研究会や検討会において分析を行った。中世論義における論題の変化や、『論題集』における題目所載の傾向、他の論目一覧の可能性など、新たな検討課題も出てきた。

論議書の本としての形態、内容面からの分類など、現在指標がないことも問題提起され、（平成 24 年度公開研究発表会、藤平寛田口頭発表「論義書の諸形態」など）今後の課題となった。

（２）論義書の教義面での分析

四年間の研究会では、検討すべき論題について、意見を交わした。「龍女成仏」の他、「泥木図像」「草木成仏」「一念三千」などの論題の重要性が議論となった。その結果、中世談義書における論義の意義や問題点を整理することができた。

また具体的に取り組む論題の絞り込みを行い、「龍女成仏」を中心に進めた。

『尊談』を初めとして、「龍女成仏」を論じた論義資料を翻刻し、それを解析した。

（３）公開研究会や学会発表における成果の公表

四年間のうち、初めの三カ年は、非公開の研究会を行い、検討を重ねて議論を深めた。

研究会の発表内容としては、初年度に、渡辺が「伝忠尋撰『七百科條鈔』について」、藤平が「『宗円集』『宗満集』について」の発表を行い、参加者で検討した。また二年目は、渡辺が「妙法院門跡龍華蔵北蔵の典籍について」、都守が「伝日蓮筆『天台深極抄』について」、藤平が「『論題集』について」の発表を行い、参加者で検討した。伝日蓮筆『天台深極抄』に関する成果は、今後、日蓮宗と天台教学について検討するための基礎となる貴重な発表であった。その他、研究会では、研究方法の確認・調整や、収集書目の選定、論目整理についてなどを議論し、現在の進行を確認、今後の進め方などを検討するなどした。

そして最終年度、二〇一二年一〇月二七日には公開研究会を、常円寺日蓮仏教研究所（東京都新宿区）において行い、成果を公表した。談義書・談義所研究者が集まり、議論が深められた。

発表内容は、渡辺「尊談の論目と引用書目について」、藤平「天台論義書の諸形態」、大久保「尊談における龍女成仏説について」である。会場から意見が出され、理解を深めると同時に、問題点や課題も見つかった。

なお、毎年、学会などにおいて、代表者・分担者・協力者はそれぞれ成果を発表している。（詳細は、５の一覧を参照。ここは略す。）

（４）報告書の公刊

四年間の集大成として、年度末に、報告書『中世における談義書資料』を公刊した。

第Ⅰ部は、論考編として、解説をまとめた。

初めの「『宗円集』『宗満集』の研究」は、論義の基本書である『宗円集』『宗満集』についての研究である。論義の研究では、『宗円集』『宗満集』の重要性は早くから指摘されてきたが、その本文公開されておらず、内容がよく理解されていなかった。先行研究を確認し、本書の意義と問題点をまとめた。資料編には、『宗円集』『宗満集』の各本文の他、資料整理の結果、別本扱いするべきと判明した『宗円集算題』も翻刻した。また『宗円宗』と『宗円集算題』の項目の上下対照表も付し、利用の便を図った。

次に、「中山法華経寺所蔵『天台深極抄』（宗要集私日記）について」は、日蓮筆と伝わる本書について、その内容を分析したものである。日蓮教学は天台教学が根幹にあり、日蓮系の文献から天台学を分析することは極めて重要である。本書は、日蓮が所持し披見した可能性もあり、日蓮の孫弟子の日忍の識語があることや、「日蓮が学問のために書写した真筆である」との注記がされた上で、日蓮の檀越であった富木常忍が晩年出家して開いた下総中山の法華経寺に寄進されたものである。こうした伝来からも、当時の中古天台の研究の為に重要性が高いと思われる書であるが、これまで『国書総目録』や『仏書解説辞典』に掲載されず、一般には注目されてこなかった。それを今回、全文の翻刻とともに紹介するものである。

次に「龍女成仏説とその思想的意義―論義との関係を中心に―」では、天台で多くの議論がある「龍女成仏説」について、分析、解説を行ったものである。龍女成仏の議論は複雑で難解であるが、複雑化する理由をその典拠となる本文を解説しながら、わかりやすく示した。議論の発端となる『法華経』提婆達多品の要文の解説をはじめとして、中国天台における智顗『法華文句』、湛然『法華文句記』の議論を押さえ、最澄『法華秀句』の説を確認する。続いて、論義で問題になる文献

として、道暹『文句輔正記』、千観『即身義私記』などの論点を整理解説する。各議論の要点を押さえることにより、中世の細かく複雑な論義の内容を理解することが可能になった。重要でありながら、これまで細かな解説がされることがなく不便であったが、この度、ここに掲載したことで、多くの人の手引きとなり得る可能性がある。

最後に、伝忠尋撰『七百科條鈔』であるが、忠尋の説は、尊舜などそれ以降の天台の学僧に重要視された。『漢光類聚』などがよく知られる。忠尋の著作は、翻刻されていない書が多く、成立が不明で扱いに苦慮するものも多い。『七百科條鈔』は、中古天台の談義書に引用されることの多い書である。この度、諸本の整理を行い、その意義を紹介した。

第Ⅱ部は、第Ⅰ部に対応する資料編として、それぞれの全文翻刻を掲載した。すべて、全文翻刻が公開されるのが初めての書目である。

本研究では、多くの書目を調査収集し、分析を行ったが、今回の成果としては、その中でも重要と判断されたものを公刊した。尊舜の教学を起点としつつも、視野は大きく時代を超えて縦断的に、そして幅広い資料を視野に入れて横断的に研究を進めることを目指したため、報告書は、尊舜の著作だけに限らず、広く中古天台を視野に入れた際に、談義書・論義書の研究に資する内容を思われるものを選定した。

なお、報告書の目次であるが、Ⅰ論考編には、藤平「『宗円集』『宗満集』の研究」、都守「中山法華経寺所蔵『天台深極抄』（宗要集私日記）について」、大久保「龍女成仏説とその思想的意義―論義との関係を中心に―」、渡辺「伝忠尋撰『七百科條鈔』の研究」の四編を載せた。またⅡ資料編には、『宗円集』『宗満集』『宗円集算題』『天台深極抄』、『尊談』「龍女成仏」関係条、『七百科條鈔』を翻刻し、最後に、研究の目的や方法、経過などを記した「研究の概要」を加えた。報告書はＡ５版で全 517 頁、平成 25 年 3 月に報告書として刊行した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　21 件）

1, 渡辺麻里子「天台談義と『法華経』」、『法華経』の事典, 査読無, 2013 年, pp402-414
2, 大久保良峻「日本天台創成期の仏教―最澄と円仁を中心に―」浅草寺仏教文化講座, 査読無, 56 巻, 2012 年, pp37-54
3, 大久保良峻「天台密教の顕密説」福原隆善先生古稀記念論集『仏法僧論集』査読無, 1 巻, 2013 年, pp1-30
4, 藤平寛田「『東陽三十六箇決』について」叡山学院研究紀要, 34 号, 2012 年, pp1-17
5, 藤平寛田「『惠光房雑雑』の一考察」天台学報、査読無, 54 号, 2012 年, pp9-21
6, 藤平寛田「『隨意観法集』について」叡山学院研究紀要, 査読無, 35 号, 2013 年, pp53-100
7, 渡辺麻里子「中世文学研究における寺院師領調査の可能性」中世文学, 査読無, 56 巻, 2011 年, pp33-39
8, 渡辺麻里子「身延文庫蔵『本朝大師先徳明匠』と談義書の生成――翻刻『本朝大師先徳明匠（師資）』」興風, 査読無, 23 号, 2011 年, pp233-285
9, 大久保良峻「本学思想と神」中世神道と神祇・神道世界, 査読無, 2011 年, pp65-82
10, 大久保良峻「発心即到と自心仏」天台学報, 査読無, 53 巻, 2011 年, pp13-20
11, 藤平寛田「政海記『発明鈔』について」叡山学院研究紀要, 査読無, 33 号, 2011 年, pp53-70
12, 藤平寛田「六萬九千三百八十四言攷」天台学報, 査読無, 53 号, 2011 年, pp71-85
13, 藤平寛田「中古天台における境智冥合の諸形態」興風, 査読無, 23 号, 2011 年, pp179-232
14, 渡辺麻里子「伝忠尋撰『七百科條鈔』について」天台学報, 査読無, 52 巻, 2010 年, pp57-65
15, 渡辺麻里子「信濃国津金寺談義所と天台談義」向学の燈火, 査読無, 2010 年, pp61-103
16, 渡辺麻里子「天台談義所をめぐる学問の交流」『中世文学と寺院資料・聖教』査読無, 一巻, 2010 年, pp450-475
17, 大久保良峻「名別義通の基本的問題」天台学報, 査読無, 52 巻, 2010 年, pp9-16
18, 大久保良峻「最澄・空海の改革」新アジア仏教史 11『日本の仏教』, 査読無, 日本Ⅰ, 2010 年, pp137-197
19, 藤平寛田「『摩訶止観第五見聞』上巻の一考察」天台学報, 査読無, 51 号, 2010 年, pp79-93
20, 藤平寛田「『摩訶止観第五尊海伝受三十六箇決』について」叡山学院研究紀要、査読無、32 号, 2010 年, pp105-123
21, 藤平寛田「中古天台における「四更口決」考」天台学報, 査読無, 52 号, 2010 年 11 月, ppp37～p48）

〔学会発表〕（計　18 件）

1, 渡辺麻里子「『鷲林拾葉鈔』の引用書目について」天台宗教学大会, 2012 年 11 月 10 日, 叡山学院
2, 大久保良峻「『法華経』顕密論」天台宗教学大会, 2012 年 11 月 10 日, 叡山学院

3,藤平寛田「叡山天海藏『雑雑抄』と『惠光房雑雑』の一考察」天台宗教学大会,2012年11月10日,叡山学院
4,藤平寛田「『隨意観法集』について」叡山学会,2012年6月13日,叡山学院
5,藤平寛田「中古天台における法華深義考」,国際法華経学会,2012年10月,立正大学
6, 藤平寛田「『東陽三十六箇決』について」叡山学会,2011年6月,叡山学院
7,藤平寛田「『惠光房雑雑』の一考察」天台教学学会,2011年11月,大正大学
8,渡辺麻里子「天台宗系寺院資料から考える中世文学研究の可能性」平成22年度中世文学会春季大会公開シンポジウム,2010年5月29日,法政大学市ヶ谷キャンパス
9,渡辺麻里子「信濃国津金寺談義所と天台談義」上小仏教文化研究会・新上田自由大学歴史学教室、2010年6月19日,上田市別所温泉,あいそめの湯多目的ホール
10,渡辺麻里子「尊舜談『天台伝南岳心要見聞』について」天台宗教学大会,2010年11月13日,叡山学院
11,渡辺麻里子「妙法院門跡龍華蔵の聖教について」仏教文化講座,2010年11月28日,三十三間堂本坊妙法院門跡
12,大久保良峻「自心仏と発心即到」天台宗教学大会,2010年11月13日,叡山学院
13,藤平寛田「政海記『発明鈔』について」叡山学会,2010年6月,叡山学院
14,藤平寛田「六萬九千三百八十四言攷」天台宗教学大会,2010年11月13日,叡山学院
15,渡辺麻里子「伝忠尋撰『七百科條鈔』について」天台宗教学大会,2009年11月7日,大正大学
16,大久保良峻「名別義通の基本的問題」天台宗教学大会,2009年11月7日,大正大学
17,藤平寛田「『摩訶止観第五尊海伝受三十六箇決』について」叡山学会,2009年6月,叡山学院
18,藤平寛田「中古天台における「四更口決」について」天台宗教学大会,2009年11月7日,大正大学

〔図書〕(計０　件)

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　麻里子（WATANABE　MARIKO）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：３０４３１４３０

(2)研究分担者
大久保　良峻（OOKUBO　RYOSYUN）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：３０２１３６６４

(3)連携研究者
藤平　寛田（HUJIHIRA　KANDEN）
天台宗典編纂所編集員
都守　基一（TSUMORI　KIICHI）
日蓮仏教研究所・主任
ジャクリーヌ・ストーン
（Jacqueline I.Stone）
プリンストン大学・教授